9章　若者にとってのネットワーク形成の困難と可能性

西村美東士

1．個人に知的主体性や自立的価値を要請し続けるものとしてのネットワーク

ネットワークとは何なのか。水平性、自発性、柔軟性、異質の交流、ギブ・アンド・テイクなど、ネットワークに関する議論にはいくつかの異なったイメージが交錯していると思われる。筆者としては、ここでは、生涯学習社会形成の視点と、青年の自己成長に対するピア・コンセプト（仲間意識）の影響に重大な関心をもつ立場から、とくに、自立と依存の統一というネットワークの特性に着目し、同一化への自らの誘惑に打ち勝って異質の他者と交流するネットワーク型社会の担い手としての青年の自己成長の可能性を探ることにした。

学習とは「マネブ、ナラウ」という意味であるから、もともとは上下関係やヒエラルキーに基づく言葉だととらえられる。しかし、学習活動の中での上下関係が強すぎると、一人ひとりの個性を抑圧する「同一化」にもつながる。「先生に従え、優等生に続け」というわけである。この問題を逆にいえば、同一化は水平関係につながるものではなく、上下関係をもたらすものだということになる。

ここに「同一化の不幸」ともいうべき根深い問題がある。「みんなが同じことを考えて同じものを好きになること」を自分にも他人にも求めてしまい、そのために、自分を不幸にしたり、他者の個性や自由を蹂躙して迷惑をかけたりしてしまう。たとえば、いじめは、仲間集団（ピア・グループ）に同一化できない人への糾弾として行われている。同一化は、実際には、人びとを横に並べることにはならない。画一化した物差しをむりやりすべての人に当てはめて、その物差しで序列付けすることになりがちである。これを、ヒエラルキー、すなわち、ピラミッド型の縦の関係ということができる。

これに対して、他者の異なる枠組を歓迎する生涯学習社会の形成が実現するとしたら、それは、それぞれ方向の違う個性や価値を認めあうことだから、ネットワーク型の水平関係だということができる。これが、競争と同調を強いる学歴偏重社会での自己成長と、生涯学習社会における自己成長との決定的な相違なのだと考えられる。そこでの人間関係は、いわゆる一蓮托生の同志でもなく、かといって孤立でもない。各人が水平に関係を保つ。異種の者も混在する。目的も一人ひとり違う。

それゆえ、ネットワークは、安定を望む者には厳しいシステムでもある。従来のピラミッド型組織においては、同種の者が集まり、同じ目的や考え方のもとに統合され、露骨にあるいは暗黙のうちにヒエラルキーとそれへの合意がつくりあげられ、これが一定の安定をもたらしてきた。ヒエラルキーの中では、個人は自己の主体性を発揮することよりも、制度の枠組の中での自分のポジションに合わせて生きていくことを心がければよい。ヒエラルキーの中での自己実現の難しさに悶々としている人もいるが、ヒエラルキーに甘んじて従属している人もいる。これに対して、ネットワークという新しい志向にとっては、自

発的意思にもとづく水平なギブ・アンド・テイクの交流が重要であり、そのためには互いが異質の価値（自立的価値）をもっていることが不可欠の条件になる。それゆえ、ネットワークとは、各人があえてそれを行うすぐれて意識的な行為ということができる。その意味で、ネットワークは人間以外の動物にはありえないものでもある。ネットワークは、一人ひとりに知的主体としての感覚をよびさましてくれる。しかし同時に、個人に知的主体性や自立的価値をたえまなくきびしく要請し続けるものでもある。

「時代の先取りをしている」として期待されることもある現代都市青年は、本当に、これから到来するといわれる生涯学習社会やネットワーク型社会に対して耐性を備えているといえるのだろうか。

2．親密・淡白・親友不在の３つの突出グループの抽出

本稿での分析においては、次のとおり、親密度、淡白度について算出することによって、分析対象を親密・淡白・親友不在・一般の４グループに分けて考察した。

親密度については、次の項目にどれだけ積極的に支持、肯定しているかによって測定した。「友人とのつきあい」についての、「浅く広くより、ひとりの友人との深いつきあいのほうを大事にしている」「ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話すことがある」の２項目、「親友とすること」についての、「二人で話しをするために会う」「二人で映画やコンサートにでかける」「二人でお酒を飲む」「あなたの部屋に入れる」「あなたの部屋に泊める」「二人で一泊以上の旅行をする」「恋愛関係の悩みごとを話す」「金銭・その他貴重なものの貸し借りをする」の全項目。

淡白度については、「友人とのつきあい」についての、「少数の友人より、多方面の友人といろいろ交流するほうだ」「友人と一緒にいても、別々のことをしていることがある」「友人関係はあっさりしていて、お互い深入りしない」の３項目、「友人とすること」についての全項目（前述「親友とすること」と同じ表現）の得点の正負を逆転したもの。

以上の「親密度」「淡白度」と次項に述べる「個別度」について、回答の欠けている項目をもつ標本は、「親友と呼べるような人がいない人」を除き（これについては「親友とすること」に関する回答が当然ながら欠けることになる）、全体（1116件）のうち74件あったが、これをまず分析対象から除外した。そして、積極的肯定を+1.0 、消極的肯定を+0.5 、消極的否定を-0.5 、積極的否定を-1.0 として、個々の標本の親密度、淡白度、個別度の得点を集計した。これによって、分析対象全体におけるそれぞれの「度合」に関する基本統計量が算出された。そこで、平均値から標準偏差以上の正の方向の偏りをもつ標本を抽出し、これを突出した群として、「親密グループ」と「淡白グループ」と名付けた。その結果、「親密グループ」は親密度の得点が0.50以上のもの、「淡白グループ」は淡白度の得点が0.36以上のものとなっている。その他の標本は、「一般グループ」とした。なお、ここで親密度と淡白度の両方で正の方向に突出する標本がごく少数（13件）あったが、これを新たに分析対象から除外した。また、「親友がいない人」については、別に「親友不在グループ」と名付けて比較対照することとした。以上の操作によって、親密・淡白・親友不在・一般の４つのグルーピングが行われた。その母数は1029で、全標本数の92.2%にあたる。

全体構成を図表１に、親密・淡白・親友不在・一般の構成を図表２に、各グループの基

図表1　全体構成

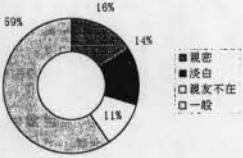
（親密&淡白とNAを以後の分析から除外）

親密	164	14.7%
淡白	142	12.7%
親友不在	112	10.0%
一般	611	54.7%
親密＆淡白	13	1.2%
ＮＡ（※）	74	6.6%

※該当項目のいずれかに無回答を含むもの
ただし、親友不在は別に取り上げた。

図表2　親密・淡白・親友不在・一般の構成

	親密	淡白	親友不在	一般
人数	164	142	112	611



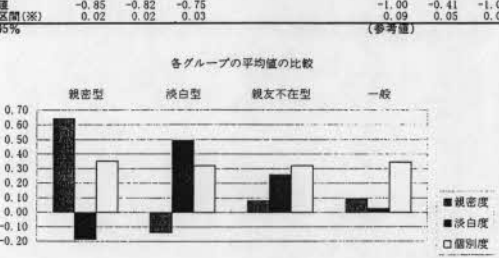
図表3　基本統計量

	親密グループ			淡白グループ			一般グループ		
	親密度	淡白度	個別度	親密度	淡白度	個別度	親密度	淡白度	個別度
平均	0.64	-0.19	0.35	-0.14	0.50	0.32	0.09	0.03	0.34
標準誤差	0.01	0.02	0.03	0.03	0.01	0.04	0.01	0.01	0.02
標準偏差	0.13	0.24	0.40	0.30	0.11	0.42	0.24	0.19	0.39
分散	0.02	0.06	0.16	0.09	0.01	0.17	0.06	0.04	0.15
範囲	0.50	1.14	1.75	1.25	0.64	1.75	1.15	0.95	1.75
最小	0.50	-0.82	-0.75	-0.85	0.36	-0.75	-0.70	-0.64	-0.75
最大	1.00	0.32	1.00	0.40	1.00	1.00	0.45	0.32	1.00
合計	105.30	-30.77	57.50	-19.80	70.59	45.50	57.50	17.41	210.25
標本数	164	164	164	142	142	142	611	611	611
最大値	1.00	0.32	1.00	0.40	1.00	1.00	0.45	0.32	1.00
最小値	0.50	-0.82	-0.75	-0.85	0.36	-0.75	-0.70	-0.64	-0.75
信頼区間(※)	0.02	0.04	0.06	0.05	0.02	0.07	0.02	0.02	0.03

※95%

	親密＋淡白＋一般＋親密かつ淡白（除外）の全体			親友不在グループ		
	親密度	淡白度	個別度	親密度	淡白度	個別度
平均	0.16	0.07	0.34	0.08	0.26	0.32
標準誤差	0.01	0.01	0.01	0.05	0.03	0.04
標準偏差	0.34	0.29	0.40	0.49	0.27	0.45
分散	0.11	0.08	0.16	0.24	0.07	0.21
範囲	1.85	1.82	1.75	2.00	1.23	2.00
最小	-0.85	-0.82	-0.75	-1.00	-0.41	-1.00
最大	1.00	1.00	1.00	1.00	0.82	1.00
合計	150.95	63.36	317.75	9.05	29.05	35.50
標本数	930	930	930	110	112	111
最大値	1.00	1.00	1.00	1.00	0.82	1.00
最小値	-0.85	-0.82	-0.75	-1.00	-0.41	-1.00
信頼区間(※)	0.02	0.02	0.03	0.09	0.05	0.08
※95%				（参考値）		

各グループの平均値の比較



本統計量を図表３に示す。なお、図表３の「親友不在グループ」については、その度合の該当項目のすべてが無回答のためにその標本の個別の平均値が算出できなかったものが、延べ３件あったことが表に示されている。

３．あてにならない現代都市青年の交友関係における「個別性」

個別度については、「つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違う」「いろいろな友人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない」の２項目をどれだけ積極的に肯定しているかによって測定した。

本稿で個別度を重視した理由は、先述のネットワークに関する私見から、さしあたりは、「同一化」に対する「個別化」への耐性の有無が本論の考察において重要な判断基準になると思われたからである。

たしかに先の図表３の基本統計量を見ると、該当事項については欠損値のない「親密＋淡白＋一般＋親密淡白の全体」では、「個別度」の平均は+0.34 というやや肯定的な傾向が示されている（+0.5が「まあそうだ」の消極的肯定である）。ちなみに、親密度は0.16、淡白度は0.07である。これだけを見ると、現代都市青年は、ネットワーク型のつきあいに対しての順応性はある程度はあるといえそうである。しかし、親密、淡白、親友不在、一般のグループのあいだに、あとで見られるほかの特徴的な項目におけるような大きな差が「個別度」においては見られないのである。とくに、ほかでは多くの特徴を見せる「親友不在グループ」でさえ、「個別度」においては、ほかのグループと大きな差が見られない。また、仲間関係が「淡白」であることが「個別」への耐性の保障になると考えたいところだが、実際には「淡白グループ」の「個別度」は、「親密グループ」や「全体」よりごくわずかだが劣っている。

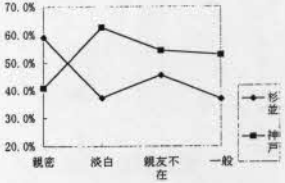
どうも、「つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違う」や「いろいろな友人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない」などの現代青年の個別的関係の傾向は、かならずしも、他者の異なる枠組を歓迎したり、それぞれ方向の違う個性や価値を認めあったりする積極的で主体的な「ネットワーク型の水平関係」を直接的に表わすものとはいえないようだ。そこで、ここでは、「個別度」よりももっと本質的に、「異質な他者を対等な立場から受け入れる」というネットワークの困難な課題を考察の根底に据えながら、ほかの項目におけるグループごとの特徴を追うことにする。

４．親密型の杉並、淡白型の神戸

図表４によると、親密度の突出したグループ（以下、たんに「親密型」と呼ぶ）と淡白度の突出したグループ（以下、たんに「淡白型」と呼ぶ）において、杉並在住者と神戸在住者の構成比が逆転している。「親密型の杉並、淡白型の神戸」と概観することができる。これは、図表５の性差および図表６の最終学歴と関連していると考えられる。すなわち、親密型は一般型とほぼ同様に女子が６割以上を占めているが、淡白型になるとそれが５割強に落ち込んで男子の割合が多くなるのである。さらに、親密型の杉並の女子の構成の要因のひとつは、図表６の専門学校卒の者だと思われる。なお、親友不在型の場合は、一般型においては４割以下の男子の割合が過半数にまでなっている。

図表4　杉並・神戸の在住

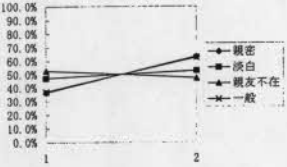
	親密	淡白	親友不在	一般
杉並在住	59.1%	37.3%	45.5%	37.0%
神戸在住	40.9%	62.7%	54.5%	52.9%



図表5　性別

FQ1

	親密	淡白	親友不在	一般
1　男性	36.6%	47.2%	52.7%	37.3%
2　女性	63.4%	52.8%	47.3%	62.7%
NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

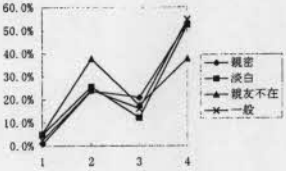


図表6　最終学歴

FQ9

（現在学生以外のうち、大学院卒省略）

	親密	淡白	親友不在	一般
1　中学卒	1.0%	4.9%	5.4%	2.6%
2　高校卒	23.8%	25.6%	37.8%	24.1%
3　専門学校卒	21.0%	12.2%	17.6%	16.2%
4　短大大学卒	53.3%	52.4%	37.8%	54.9%



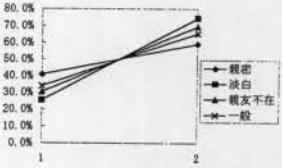
5．一人暮しによる交友関係の親密化

図表７は親との同居について、図表８は親以外の人との同居について示している。両方の図から、親密型の場合には「一人暮し」の者が占める割合が多いということがわかる。「一人暮し」のほうが、「親密度」の測定に利用した「浅く広くより、ひとりの友人との深いつきあいのほうを大事にする」、「ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話す」、「二人で話しをするために会う」「二人で映画やコンサートにでかける」「二人でお酒を飲む」「部屋に入れる」「部屋に泊める」「二人で一泊以上の旅行をする」「恋愛

図表７　親との同居

FQ4

	親密	淡白	親友不在	一般
1　していない	40.9%	25.4%	30.4%	33.9%
2　している	59.1%	74.6%	69.6%	65.5%
NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%

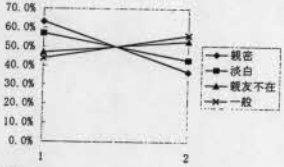


図表８　親以外の人との同居

FQ4SQ

（親と同居していない人のうち）

	親密	淡白	親友不在	一般
1　していない	63.2%	57.1%	47.1%	43.9%
2　している	36.8%	42.9%	52.9%	56.1%

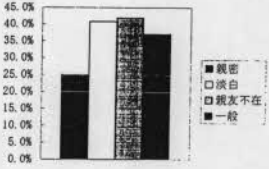


図表９　１年間の自分自身の収入

FQ11

（100万円未満の者の比率）

	親密	淡白	親友不在	一般
100万円未満	25.0%	40.8%	42.0%	37.2%



関係の悩みごとを話す」「金銭・その他貴重なものの貸し借りをする」などのためには有利な条件になるということであろう。また、図表９は自分自身の収入のうち、年間100 万円未満の者の構成比率を比較したものであるが、これは、「交友関係」の自己決定のためには経済的側面も重要であることを示しているととらえられる。

このことは、逆に淡白型についていえば、とくに「親との同居」や「親への経済的依存」が親密型の交友にとっての阻害要因になっているということでもある。ネットワーク型の人間関係のためには、淡白であるという要素も重要な場合もあるだろうが、現代都市青年の現実の生活においては、そういう主体的な要素よりも、「親との同居」という家庭環境や経済的依存の要素が青年の交友関係を「淡白たらしめている」といえるのだろう。

6．スポーツ系の親密、文化系の淡白、無所属の親友不在

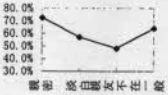
図表10から図表12までは、学校時代に続けたクラブ・サークルについてである。スポー

学校時代のクラブ・サークル
図表10　スポーツ系　FQ10_1
図表11　文化系　FQ10_4

図表12　所属せず　FQ10_5

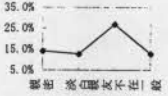
	親密	淡白	親友不在	一般
スポーツ系	72.6%	57.0%	48.2%	64.0%
文化系	20.7%	28.9%	28.6%	21.8%
無所属	14.0%	12.7%	26.8%	12.6%

スポーツ系



文化系

無所属（所属せず）



ツ系においては親密型が、文化系においては淡白型、親友不在型が、無所属においては親友不在型が、それぞれ多くなっていることがわかる。とくにスポーツ系については、一般でも64.0%を占めており、学校の体育系の部活動がその後の本人の交友関係の持ち方に「親密」の方向で大きな影響を与えていると考えられる。

ここで問題にしたいのは、過去の学校生活における青少年の人間関係の学習が、体育系

の部活動以外の普段の場ではどのように行われてきているかということである。今回の調査でそれを読み取りきることはできないが、体育系の部活動が肥大化して人間関係の学習がそこだけに過度に依存して行われるという学校教育の問題や、社会の教育的諸機能が学校教育制度だけに過度に集中するという問題が示されていると考えられる。体育系の「親密さ」も重要なのだが、互いの個性を尊重しあいながら、個々の自己決定によって、ときには異なった行動をする「淡白さ」や「個別性」も今後のネットワーク社会においては同様に重要なのである。

7．親密の道具としてのダイヤルQ²とモノたち

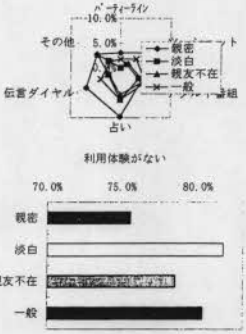
図表13はダイヤルQ²の利用体験であり、図表14は自分専用で使っているモノについてである。

ダイヤルQ²に関しては、既知の友人とのコミュニケーションに便利な伝言ダイヤルだけでなく、未知の人と出会う「道具」としてのパーティーライン、ツーショットや、コミ

図表13　ダイヤルQ２の利用体験

Q23

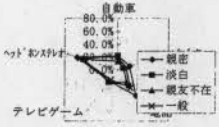
	親密	淡白	親友不在	一般
パーティーライン	3.0%	0.0%	0.0%	1.8%
ツーショット	6.1%	1.4%	1.8%	3.6%
アダルト番組	4.9%	4.2%	5.4%	5.7%
占い	9.6%	6.3%	5.4%	6.4%
伝言ダイヤル	7.9%	2.8%	2.7%	4.6%
その他	5.5%	2.8%	5.4%	2.5%
利用体験がない	75.6%	81.7%	78.6%	80.4%



図表14　自分専用で使っているモノ

FQ12

	親密	淡白	親友不在	一般
自動車	22.6%	22.5%	13.4%	20.5%
バイク	20.1%	9.2%	10.7%	14.4%
電話	50.0%	30.3%	24.1%	34.4%
テレビゲーム	22.0%	23.2%	22.3%	18.7%
ﾍｯﾄﾞﾎﾝｽﾃﾚｵ	65.2%	54.9%	55.4%	60.6%



ュニケーションの直接の手段ではない占いにおいてまで、全体から見た利用率は少ないとしても、親密型が他のグループより抜き出ている点は興味深い。また、淡白型にアダルト番組を含めてダイヤルQ²の利用体験がない人が多いという点も、淡白というよりむしろ停滞ともいうべき風土を感じさせる。その点では、既知の人とより密接に出会いを重ねる親密型の青年たちのもっている姿勢のほうが、未知の人との出会いにも意欲的に躍むネットワークの姿勢に通じるものがあるといってもよいのだろう。

また、自分専用で使っているモノに関して、テレビゲームを除き、自動車、バイク、電話、ヘッドホンステレオのそれぞれにおいて親密型が抜き出ている点についても、同様のことがいえそうである。もちろん、先に述べた「一人暮し度」や「経済的自立度」が、その所有率の決定的な要因になっていることは否めないが、少なくとも結果論的には、テレビゲームはともかく、クルマ・バイク・電話・ウォークマンなどの「モノたち」が、「閉じこもり」のためではなく、他者と親密になるために使われているということはいえそうである。

8．他者や社会を否定する「親友不在型」の不満

親友不在型については、次のように他とはかなり異なる傾向が表れている。図表15は友人数についてであるが、5人以上、10人以上の友人をもつ者がふつう9割前後を占めているなかで、友人数が10人以上の者が半数を割り込み、4人以下の者が3割以上を占めている。

図表16は現在の生活の満足度であるが、他のグループがほぼ同様なのに対して、親友不在型だけが否定的な方向にシフトした分布を描いている。図表17は日々の生活の充実感であるが、消極的あるいは積極的に否定する者の比率が7割を超えており、他のグループとの差異が鮮明に現れている。

図表18は「自分の努力によって社会が変わるとは思えない」という社会に対する個人の

無力感を表わしているが、そういう感覚を積極的に肯定する者の比率は親友不在型だけが抜き出ている。図表19は「現在の日本の社会は公平さが確保されている」という社会に対する公平感を表わしており、図表19は「日本の若者は公共性が高い」という他者に対する評価を表わしているが、いずれも積極的に否定する者の比率が他のグループより高い。

親友不在型には高校卒の割合が他より多いことはすでに見てきたところだが、これとつなげてやや大胆に推論すると、①何らかの理由による専門学校、大学への非進学→②高学歴社会において「自分だけが高卒」ということによる内面的な不適応→③自分を不公平に扱う社会への不満→④そういう社会を支える他者への不信→⑤親友や友達の不在→⑥日々の生活の充実感の欠如、という流れが考えられる。

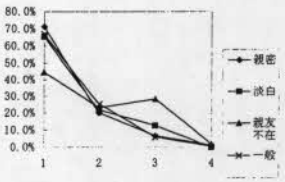
本稿において、親友不在型については、そもそもは、「あなたには『親友』と呼べるような人はいますか」という項目への回答で判断したのであり、それに「いない」と答えたからといって、かならずしも社会に対して消極的な傾向になると筆者として予想していたわけではない。「本当に自分が求めている親友とは何だろうか」というように、「本当の親友を求める気持ちが強いあまりに」、「いない」と答える者も多いだろうと思っていた。また、他者や社会に対する不満についても、筆者としては、新しい社会を創り出す若者文化にとっては必要な要素であるという感覚をもっていた。しかし、少なくとも親友不在の若者たち自身にとっては、そういう悠長なことをいっていられる状況ではないと痛感する。「せっかく」彼らが他者や社会に批判や不満をもっていても、それを相手に対する働きかけや提言にしていく夢や見通しを彼ら自身がもてないでいるのである。彼らは、いまだに学歴偏重の競争と同調を強いる画一的な現代社会のなかで、仲間のいないまま、出口の見えないまま、あえいでいるというべきなのではないか。

ネットワークは、個人の自立的価値と各々の自己決定に基づくものであるといえる。そして、教育学的視点においては、すべての人間がそれを実現するための「無限の可能性」を本来的にもっていると考える。しかし、それらに加えて重要なことは、その「可能性」

図表15　友人数

Q1

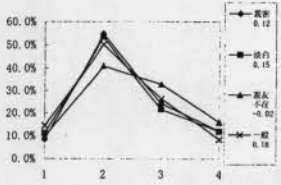
	親密	淡白	親友不在	一般
1　１０人以上	71.3%	65.5%	44.6%	67.1%
2　５人～９人	20.1%	21.8%	23.2%	25.5%
3　２人～４人	6.7%	12.7%	28.6%	5.9%
4　１人以下	1.2%	0.0%	1.8%	0.5%
ＮＡ	0.6%	0.0%	1.8%	1.0%



図表16　現在の生活の満足度

Q31_1

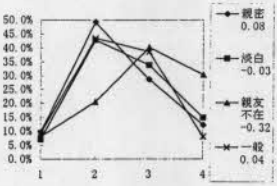
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.12	0.15	-0.02	0.18
1　積極肯定	8.5%	11.3%	9.8%	14.6%
2　消極肯定	54.9%	53.5%	41.1%	50.2%
3　消極否定	24.4%	21.8%	33.0%	26.5%
4　積極否定	12.2%	12.0%	16.1%	8.5%
ＮＡ	0.0%	1.4%	0.0%	0.2%



図表17　日々の生活の充実感

Q31_7

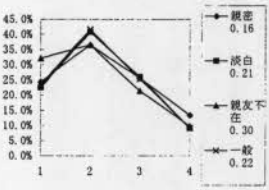
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.08	-0.03	-0.32	0.04
1　積極肯定	9.8%	7.0%	8.0%	9.3%
2　消極肯定	49.4%	43.0%	20.5%	43.5%
3　消極否定	28.7%	33.8%	40.2%	38.6%
4　積極否定	12.2%	14.8%	30.4%	8.0%
NA	0.0%	1.4%	0.9%	0.5%



図表18　社会に対する個人の無力感

Q31_3

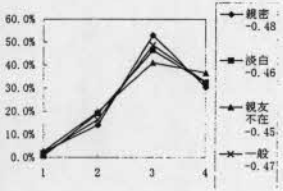
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.16	0.21	0.30	0.22
1　積極肯定	24.4%	22.5%	32.1%	23.4%
2　消極肯定	36.6%	40.9%	36.6%	41.7%
3　消極否定	25.6%	26.1%	21.4%	25.4%
4　積極否定	13.4%	9.2%	9.8%	9.2%
NA	0.0%	1.4%	0.0%	0.3%



図表19　社会に対する公平感

Q31_4

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.48	-0.46	-0.45	-0.47
1　積極肯定	2.4%	0.7%	2.7%	2.0%
2　消極肯定	14.0%	19.0%	19.6%	16.4%
3　消極否定	53.0%	46.5%	41.1%	48.8%
4　積極否定	30.5%	32.4%	36.6%	32.6%
NA	0.0%	1.4%	0.0%	0.3%



をおしとどめている本人の内的阻害要因と社会の外的阻害要因を明らかにすることであろう。交友関係や他者、社会に関する価値観について、あくまでも彼らの自己決定を保障することは不可欠であるが、自立的価値と自己決定の保障の実質的な実現のためには、これらの阻害要因の解決が必要である。

9．他者や社会よりも与えられた現実に自ら埋没する「淡白型」のリアルな孤独

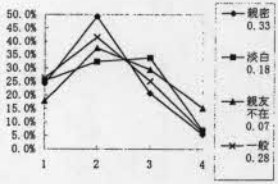
淡白型については、多くの項目では一般型とほとんど変わらない分布を見せているのだが、特定の項目においては、親友不在型に次いで特徴的な面を見せるときがある。図表20

は日本の将来への関心についてであるが、否定的傾向が強い。かといって、「自分だけの世界」を深く味わえているわけではない。図表21は「ヘッドホンステレオで音楽を聴いていると自分だけの世界に入ったような感覚になる」に対する回答だが、消極的ではあるが否定的であり、平均値でもこのグループだけがマイナスになっている。「互いに深入りしない」という淡白型の心の中には「他者や社会もないが、自分もない」のである。「個の自立的価値」が交流するネットワークの理想像とは程遠い。

図表20　日本の将来への強い関心

Q31_2

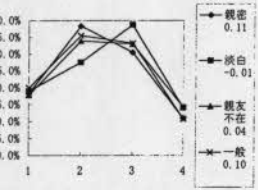
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.33	0.18	0.07	0.28
1　積極肯定	24.4%	25.4%	17.9%	26.4%
2　消極肯定	49.4%	32.4%	37.5%	41.6%
3　消極否定	20.7%	33.8%	29.5%	25.2%
4　積極否定	5.5%	7.0%	15.2%	6.4%
NA	0.0%	1.4%	0.0%	0.5%



図表21　ヘッドホンステレオで自分だけの世界

Q32_2.

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.11	-0.01	0.04	0.10
1　積極肯定	18.3%	19.0%	17.9%	20.0%
2　消極肯定	38.4%	27.5%	33.9%	35.5%
3　消極否定	30.5%	38.7%	33.0%	33.2%
4　積極否定	11.0%	14.1%	14.3%	10.8%
NA	1.8%	0.7%	0.9%	0.5%

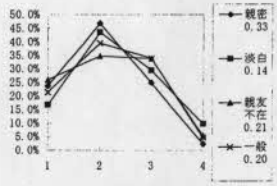


図表22は「将来にそなえて耐えるより、今という時間を大切にしたい」に対する回答である。この平均値は、親密型と親友不在型がともに一般型よりも大きいのに対して、淡白

図表22　将来にそなえて耐えるより、今という時間が大切か

Q32_7

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.33	0.14	0.21	0.20
1　積極肯定	23.8%	16.9%	25.9%	21.4%
2　消極肯定	47.0%	43.7%	34.8%	39.6%
3　消極否定	25.0%	29.6%	33.9%	34.0%
4　積極否定	2.4%	9.9%	5.4%	4.7%
NA	1.8%	0.0%	0.0%	0.2%



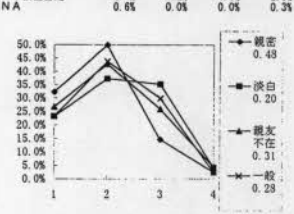
型だけが一般型より小さくなっている。これは、おもに、他のグループより積極的に肯定する人が少ないことと、積極的に否定する人が多いことによるものであろう。つまり、現代都市青年が一般的には「将来より今」と考えているのに対して、淡白型は、相対的には、「今という時間よりも、将来にそなえて耐える」という勤勉主義の傾向を秘めているといえるのである。

しかし、残念ながら、そこでの「将来にそなえる」は、積極的な意思をもったものとはいえないだろう。なぜなら、他者や社会への関心をもたないまま、そこに自分の現実生活を適応させようとすることは、自己決定とはいっても、心からの納得や充実のないものにすぎなくなるからである。図表23は「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ」に対する回答であるが、淡白型が一番否定的である。「そんなことは望んではいけない」という自己抑圧が強いのだと考えられる。自己抑圧は、ほかの無関係な場面では、頑固なこだわりにつながりやすい（転嫁）。図表24は「自宅外のトイレの洋式便座に直接座りたくない」に対する回答だが、積極的肯定をする者の比率が他のグループより抜き出ている。他者と間接的にではあっても肌を触れ合わせることに対する潔癖症的なまでの拒絶の感覚は、当面は現実の他者や社会も許容してくれる範囲であることには違いないが、「それでは、生活を共にするなどという事態になったときにはどうするのか」という新たな心配が出てくるだろう。現実社会の与える空しく退屈な生活を受け入れ、他者とも互いに深入りしないように自己規制する彼らの心の中には、意識、無意識の心配ごとが際限なく渦巻いているのではないか。

図表23　どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切か

Q32_8

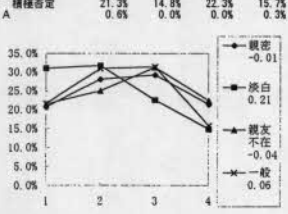
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.48	0.20	0.31	0.28
1　積極肯定	32.3%	23.2%	26.8%	23.4%
2　消極肯定	50.0%	37.3%	42.9%	43.9%
3　消極否定	14.6%	35.2%	25.9%	30.0%
4　積極否定	2.4%	4.2%	4.5%	2.5%
NA	0.6%	0.0%	0.0%	0.3%



図表24　自宅外のトイレの洋式便座に直接座りたくないか

Q32_11

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.01	0.21	-0.04	0.06
1　積極肯定	20.7%	31.0%	21.4%	21.6%
2　消極肯定	29.0%	31.7%	25.0%	30.9%
3　消極否定	29.3%	22.5%	31.3%	31.4%
4　積極否定	21.3%	14.8%	22.3%	15.7%
NA	0.6%	0.0%	0.0%	0.3%



淡白型は、いわば、他者や社会よりも与えられた現実に自ら埋没しているといえる。自己と他者の存在に悩み「哲学」する思春期を経てこなかった人たちなのかもしれない。しかし、次に述べる親密型のような「積極的な」過剰適応と比較すると、淡白型の青年たちは現代社会の与える「不幸」にもっとリアルに対面しているのかもしれないと思えるときが筆者にはある。そもそも、「他者とわかりあう」や「自分だけの世界に入る」や「将来の現実よりも今という時間を大切にする」や「どんな場面でも自分らしさを貫く」などと

いうことが、現実社会においてできることなのだろうか。少なくとも、これらの答えはイエスかノーのどちらかには決めつけられないはずだと考えるのである。

ネットワークの支え手は数人の「突出した人たち」（キーパーソン）であるといえるだろうが、それが交友関係でいえば親密型の青年たちなのか、淡白型の青年たちなのかは不可知である。むしろ、淡白型の青年たちに対しては、「自分らしさを貫くことなど望んではいけない」という彼らの自己抑圧が、じつは「それを貫くことなど、他者や社会は許してくれないだろう」という現実的すぎるがゆえに不合理な思い込みから発しているものにすぎないのではないかという疑問を提起し、その疑問を何らかの出会いの中で彼ら自らが気づけるような体験の場を提供することこそ、社会の側が考えなければならないことなのだと思う。

１０．他者や社会の目に追い回される「親密型」の過剰適応コミュニケーション

親密型については、基本的には、積極的に「今というとき」と「自分」を生き、社会に対しても比較的には協調または関与の意識をもち、「浅く広くより、深いつきあい」を大事にして充実した交友関係をもちながら暮らしているということは、すでに見てきたところから明らかであるといえよう。実際、「深いつきあい」をしながらも、10人以上の友人をもつ人の比率（71.3%）が、調査対象全体の平均（65.2%）よりもやや上回っているのである（前出図表15）。

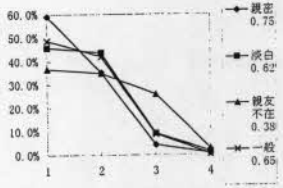
図表25は「自分には自分らしさというものがあると思う」に対する回答であるが、積極的に肯定する人の比率が、他のグループより抜け出ている。また、「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」とする人がかなり多い（前出図表23）。さらに、図表26、27、28が示すように、恋人の存在、恋人ではない異性の親友の存在、デートする異性の存在になると、突出して「恵まれた」条件にあることがうかがわれる。しかし、この一見、充実した青春期のように見える親密型にも、やはり屈折が見いだされるのである。

たとえば、図表29は「他人の行動や考え方が場面ごとに変わるのは許せない」に対する回答を示しているが、これを積極的に肯定する人の比率（21.3%）が他のグループや調査対象全体（14.8%）より多く、他者の変化に対するいらだちを表わすものとなっている。実際には本人の幻想にすぎない「自分らしさ」だったにせよ、本人が「自分らしさ」だと思えるものを貫徹しようとしているあいだはかまわないのだろうが、他者の社会的な「役割演技」や「仮面」まで受容できなくなるとすれば、それは本人にとっても問題になりそうである。自分にも相手にも「いい加減」にできないスポーツ系の厳しさと辛さが表れているようである。しかも、ここで、相手との「深いつきあい」を大切にしている本人自身が大切にしている「自分らしさ」というものが、つぎに見るようなものであるとしたら、これはかえって根が深いともいうべきなのである。

図表25　自分には自分らしさというものがあると思うか

Q32_4

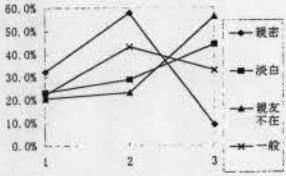
		親密	淡白	親友不在	一般
平均得点		0.75	0.62	0.38	0.65
1	積極肯定	59.1%	45.8%	36.6%	48.8%
2	消極肯定	35.4%	43.7%	34.8%	42.1%
3	消極否定	4.3%	9.2%	25.9%	8.7%
4	積極否定	0.6%	1.4%	2.7%	0.3%
NA		0.6%	0.0%	0.0%	0.2%



図表26　恋人の存在

Q9

		親密	淡白	親友不在	一般
1	過去にいた	32.3%	23.2%	20.5%	22.3%
2	現在いる	57.9%	28.9%	23.2%	43.4%
3	いない	9.1%	44.4%	56.3%	32.9%
NA		0.6%	3.5%	0.0%	1.5%

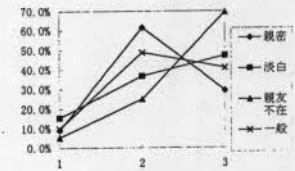


図表27　恋人ではない異性の親友の存在

Q10

		親密	淡白	親友不在	一般
1	過去にいた	9.1%	15.5%	5.4%	10.0%
2	現在いる	61.6%	36.6%	25.0%	48.8%
3	いない	29.3%	47.2%	69.6%	40.9%
NA		0.0%	0.7%	0.0%	0.3%

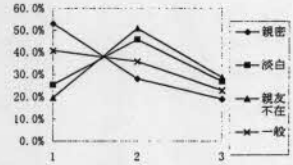
※　親友不在グループの「現在いる」の25.0%は理論的に矛盾している。



図表28　デートする異性の存在

Q11

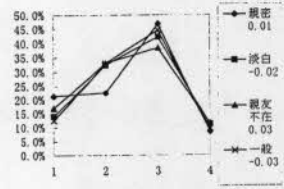
		親密	淡白	親友不在	一般
1	いる	53.0%	25.4%	19.6%	40.8%
2	いない	28.0%	45.8%	50.9%	35.8%
3	ほしい	18.9%	26.8%	28.6%	22.7%
NA		0.0%	2.1%	0.9%	0.7%



図表29　他人の行動や考え方が場面ごとに変わるのは許せないか

Q32_9

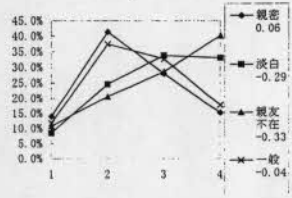
		親密	淡白	親友不在	一般
平均得点		0.01	-0.02	0.03	-0.03
1	積極肯定	21.3%	14.1%	17.0%	12.6%
2	消極肯定	22.6%	32.4%	33.0%	32.9%
3	消極否定	47.0%	42.3%	38.4%	44.7%
4	積極否定	8.5%	11.3%	11.6%	9.7%
NA		0.6%	0.0%	0.0%	0.2%



図表30　ブランドものを身につけているか

Q33_7

		親密	淡白	親友不在	一般
平均得点		0.06	-0.29	-0.33	-0.04
1	積極肯定	14.0%	8.5%	10.7%	11.8%
2	消極肯定	41.5%	24.6%	20.5%	37.5%
3	消極否定	28.0%	33.8%	28.6%	32.7%
4	積極否定	15.2%	33.1%	40.2%	17.8%
NA		1.2%	0.0%	0.0%	0.2%



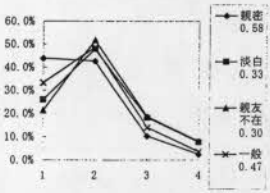
図表30は「ブランドものを身につけている」、31は「ファッションは自分らしさを表現するアイテムだ」、32は「朝シャンをする」、33は「エステティックを受けてみたいと思う」、34は「人にウケるようなことをよく言う」の回答の状況である。すべて親密型が他のグループより突出して肯定しているという傾向が読み取れる。淡白型、親友不在型は親密型より男の比率が少ないことが、ファッション関係などの数字についてはある程度影響を与えているのだろうが、その分を差し引いても、あるいは男女がほぼ同率の一般型と比べても、親密型の一貫した流れをはっきりと示している。すなわち、「今というとき」と「自分」を生きているといっても、それは得体の知れない社会の物差しで他者が見るという意味での、外見上の「今と自分」なのである。

このような観点から図表35の「自分がどんな人間かわからなくなることがある」への回答を見ると興味深い。積極的肯定と消極的肯定をあわせると、一般型はもちろん、他のいずれのグループよりも、親密型のほうがやや高率である。親友不在型（積極的肯定と消極的肯定の合計）や調査対象全体の平均（積極的肯定14.6%、消極的肯定28.4%の双方）よりもわずかながら上回っているのである。他者との関係を大切にし、他者や社会に認められようとして一生懸命に努力し、その結果、そのような努力をそれほどしない青年たちと同様に、他者や社会の目に無意識のうちに追い回されることになってしまった親密型の迷いがここに表れている。これもまた、自立的価値の交流するネットワークには程遠い、過剰適応としてのコミュニケーションの淋しい姿であるといえよう。

図表31　ファッションは自分らしさを表現するアイテムか

Q32_12

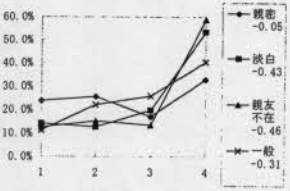
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.58	0.33	0.30	0.47
1　積極肯定	43.9%	26.1%	21.4%	33.4%
2　消極肯定	42.7%	47.9%	51.8%	48.6%
3　消極否定	10.4%	18.3%	18.8%	14.1%
4　積極否定	2.4%	7.7%	8.0%	3.6%
NA	0.6%	0.0%	0.0%	0.3%



図表32　朝シャンをするか

Q33_3

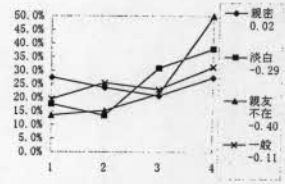
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.05	-0.43	-0.46	-0.31
1　積極肯定	23.8%	14.1%	12.5%	11.3%
2　消極肯定	25.6%	12.7%	15.2%	22.1%
3　消極否定	17.1%	19.7%	13.4%	25.9%
4　積極否定	32.9%	53.5%	58.9%	40.4%
NA	0.6%	0.0%	0.0%	0.3%



図表33　エステティックを受けてみたいと思うか

Q32_13

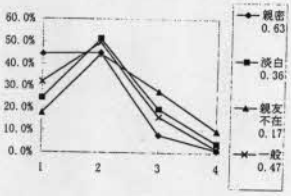
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.02	-0.29	-0.40	-0.11
1　積極肯定	27.4%	17.6%	13.4%	19.5%
2　消極肯定	23.8%	13.4%	15.2%	25.5%
3　消極否定	20.7%	31.0%	21.4%	23.1%
4　積極否定	27.4%	38.0%	50.0%	31.4%
NA	0.6%	0.0%	0.0%	0.5%



図表34　人にウケるようなことをよく言うか

Q33_1

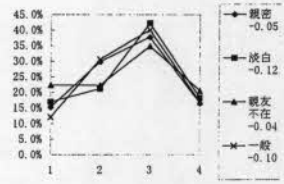
	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	0.63	0.36	0.17	0.47
1　積極肯定	44.5%	24.6%	17.9%	32.1%
2　消極肯定	45.1%	51.4%	44.6%	49.8%
3　消極否定	7.9%	19.7%	27.7%	16.2%
4　積極否定	1.2%	4.2%	9.8%	1.6%
NA	1.2%	0.0%	0.0%	0.3%



図表35　自分がどんな人間かわからなくなること
があるか

Q32_5

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.05	-0.12	-0.04	-0.10
1　積極肯定	15.2%	16.9%	22.3%	12.1%
2　消極肯定	29.9%	21.1%	22.3%	30.6%
3　消極否定	37.8%	42.3%	34.8%	40.1%
4　積極否定	16.5%	18.3%	20.5%	16.9%
NA	0.6%	1.4%	0.0%	0.3%



まとめ

(1)　友人との同一化志向による自己確立の阻害

すでに図表15で見たように、10人以上の友人をもつ人が多数派を占めている。また、図表3の「基本統計量」からは、いずれのグループも、「つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違う」「いろいろな友人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない」の2項目から成る個別度の項目については肯定的であることが明らかである。少なくとも、外見上は、友人関係は多方面に広がり、個別性に基づいて多様なつきあいが展開されているように見える。

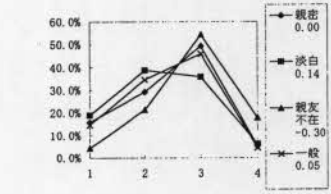
しかし、図表38の「少数の友人より、多方面の友人といろいろ交流するほうだ」につい

ては、積極的否定は少ないが、消極的否定がかなり多い（淡白型については例外だが、最初のグルーピングにおいてこの項目への回答を算入していることに注意されたい。以下に述べるいくつかの項目についても同様の注意が必要）。図表37の「友人と一緒にいても、別々のことをしていることがある」についても否定的である。また、単純集計からわかるとおり、親友について知らないこととして、「１日の行動予定」が１位（41%）であるが、２位に「知らないことは特にない」が33%で迫っている。さらに、図表38の「友人関係はあっさりしていて、お互い深入りしない」についても、一般的にはやや否定的である。つまり、互いに深入りしながら、しかも同じ行動をする傾向が指摘できるのである。

図表36　少数の友人より、多方面の友人か

Q2_3

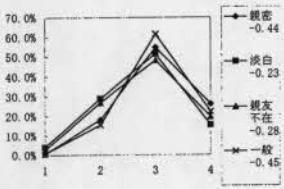
平均得点	親密	淡白	親友不在	一般
	0.00	0.14	-0.30	0.05
1　積極肯定	15.9%	19.0%	4.5%	14.7%
2　消極肯定	29.3%	38.7%	21.4%	34.7%
3　消極否定	49.4%	35.9%	54.5%	46.0%
4　積極否定	5.5%	6.3%	17.9%	4.6%
NA	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%



図表37　友人と一緒にいても、別々のことをするか

Q2_4

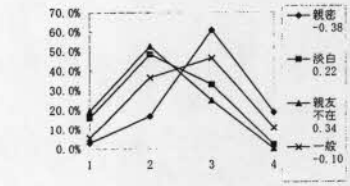
平均得点	親密	淡白	親友不在	一般
	-0.44	-0.23	-0.28	-0.45
1　積極肯定	0.6%	4.2%	2.7%	0.7%
2　消極肯定	18.3%	28.9%	26.8%	15.5%
3　消極否定	54.9%	51.4%	48.2%	61.5%
4　積極否定	26.2%	15.5%	19.6%	22.3%
NA	0.0%	0.0%	2.7%	0.0%



図表38　あっさりしていて深入りしないか

Q2_6

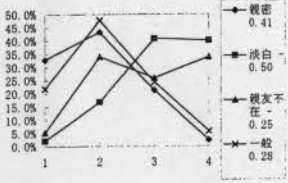
平均得点	親密	淡白	親友不在	一般
	-0.38	0.22	0.34	-0.10
1　積極肯定	3.0%	16.2%	19.6%	5.7%
2　消極肯定	17.1%	48.6%	52.7%	36.7%
3　消極否定	61.0%	33.1%	25.0%	46.6%
4　積極否定	18.9%	2.1%	0.0%	11.0%
NA	0.0%	0.0%	2.7%	0.0%



図表39　恋愛関係の悩みごとを話すか

Q3_7

平均得点	親密	淡白	親友不在	一般
	0.41	-0.50	-0.25	0.28
1　積極肯定	32.9%	2.1%	5.4%	21.9%
2　消極肯定	43.3%	16.9%	33.9%	47.8%
3　消極否定	21.3%	40.8%	25.9%	24.4%
4　積極否定	2.4%	40.1%	33.9%	5.9%
NA	0.0%	0.0%	0.9%	0.0%



一見、軽やかに多彩に展開されているように見える若者の交友関係も、実際には、「浅いつきあい」への一人ひとりの耐性が弱く、結局は、友人という限られた「他者」と同一化しようとする志向が強く、自己の個の確立を阻害する結果に陥っているのではないか。

（2）　「迷惑をかけないための」教育の影響としての、社会との関わりの消極化

図表39の「恋愛関係の悩みごとを（友人と）話す」については、一般的には肯定的であり、これらの「親密な」コミュニケーションは比較的多く行われているようである。これは、彼らにとっては、社会の他の人びととのディスコミュニケーション状況を埋める大切な役割を果たしていると考えられる。しかし、これが自分の友人以外の社会に対する姿勢になると、様相はまったく変わってしまう。

図表40の「日本の若者は公共性が高い」については、いずれのグループも否定的であり、また、すでに見たように、図表19の「社会に対する公平感」についても同様に否定的気分をもっている。図表41の「公共の場での迷惑行動に対して、自分に被害がない限り気にならない」では、どのグループともこれを否定し、若者の「正義感」を示している。他人が公共の場で迷惑をかけたりするのは許せないという、他者に対する潔癖症的な厳しさをもっているのだ。このように、ほかの青年層や社会などに対しては否定感や不満や憤りが強いのだが、かといって、前出図表18の「社会に対する個人の無力感」で見たとおり、それをみずから主体的に変革できると考えているわけではない。ここに、現代青年自身にとっての重大な「行き詰まり」があると考えられる。

筆者は、この問題の所在を次のように考える。「公共の場で迷惑をかけたりする」などの「他者に迷惑をかける行為」をしないための教育はいきわたっているが、そのプレッシャーが過重になりすぎて、自らの意思で能動的に行動する力を失っているのではないか。つまり、ある程度は迷惑をかけあっても折り合いをつけていきていくという現実的な社会性を失ってしまい、「迷惑をかけないこと」以上には積極的に社会に関与する意欲と能力を発揮できない状態に陥ってしまったのではないだろうか。そういう意味では、彼らが彼らの友人とは行なっている「深入りしたつきあい」は、友人以外の他者との関わりの欠如のもつ空虚からの逃げ道として、むしろ、非建設的な方向で機能しているのかもしれないとさえ思えるのである。

（3）　自分らしさへの過信と憧憬による社会への敗北感

図表25からは、彼らが自らは自分らしさをもっていることを確信していて、図表23からは、その自分らしさを貫くことに大きな価値を置いていることが明らかであるが（淡白型はやや例外として）、それらに過大な信用と期待をするがあまり、図表18からわかるとおり、自分らしさが社会的に認知されるようにするための行動がわからなくなり、結局は現在の自己を積極的には受容できない結果につながっていると思われる。

これを、「自分の人生は現在は生まれつきのものとしての資質によって決められているけれども、将来は資質よりも努力によって決まる」とする傾向を示しているQ36の調査結果とあわせて考えると、「自分らしさへの関心は高いが、その期待の強さと過信は、自己確立への主体的意欲や自己と社会の客観的認識にはつながらず、やみくもな努力至上主義で自分を納得させようとする非生産的傾向に陥っている」ということができる。

（4）　信頼・共感・自立の主体形成とネットワークのための社会的援助のあり方

以上の考察を、現代都市青年に対する社会的援助（青年教育）の可能性を探る視点からいえば、次の点が重要であるといえる。すなわち、同一化せずとも「異なる他者」を受容することができるようになるための基本的信頼感、多少迷惑をかけあっても折り合いをつけることができるようになるための共感的理解の能力、自分らしさを現実のなかで実現するための実践的な自立力の３つである。

本稿のまとめとして、社会が今後、青年の主体形成とネットワーク化を支援するにあたって、この信頼・共感・自立の３つのキー・コンセプトのもとに従来の青年対策を転換し、次の諸点に留意しながら援助を進めるよう提言したい。このことによって、本稿の考察で指摘した現代都市青年の個性の自己抑圧や他者否定の傾向を克服し、その水平的交流と自己や他者への信頼関係を回復して、個性の異なりを歓迎するネットワーク型社会の形成を促進することができると思われるのである。なお、詳細については、公的社会教育においてこの提言と同様の方向で実践が行われている「狛江市中央公民館青年教室」に関する拙論（西村美東士「公民館が仕掛ける出入り自由のこころのネットワーク－狛江市中央公民館青年教室のなかでの相互理解」、平成５年８月『社会教育』第４８巻第８号、全日本社会教育連合会）などがあるので、それを参照されたい。

①　「迷惑をかけない」などの「こうあるべき」という社会からの一方的な価値のおしつけを転換し、むしろ、薬に対する毒、善に対する悪を含めたあるがままの人間存在や社会現実と出会えるように援助すること。

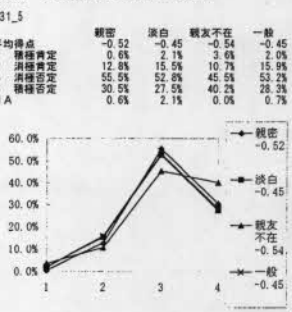
②　キャッチアップ型の勤勉主義に基づく啓発の姿勢を転換し、「自分らしさ」が自己の納得のいくようなレベルのものに見えなくても、じつは「自分らしさ」とはそれ以上のものではないことを自覚（非力の自覚）して今の自己を受容できるようになることを、援助の目標とすること。

③　団結や同一化を促そうとする姿勢を転換し、自己の「自分らしさ」を社会から承認されたいという青年自身の欲求を尊重して顕在化させ、それを自己とは異なる他者との関係のなかで実現する体験などを通して、異なる「自分らしさ」を交流できる場を提供すること。

図表40　他の若者のもつ公共性への評価

Q31_5

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.52	-0.45	-0.54	-0.45
1　積極肯定	0.6%	2.1%	3.6%	2.0%
2　消極肯定	12.8%	15.5%	10.7%	15.9%
3　消極否定	55.5%	52.8%	45.5%	53.2%
4　積極否定	30.5%	27.5%	40.2%	28.3%
NA	0.6%	2.1%	0.0%	0.7%



図表41　迷惑行動が気にならないか

Q31_6

	親密	淡白	親友不在	一般
平均得点	-0.61	-0.54	-0.53	-0.55
1　積極肯定	0.6%	1.4%	6.3%	3.4%
2　消極肯定	12.2%	14.1%	9.8%	10.0%
3　消極否定	39.6%	43.0%	39.3%	46.6%
4　積極否定	47.6%	39.4%	44.6%	39.8%
NA	0.0%	2.1%	0.0%	0.2%